

パースペクティブ科目

科目名	科目区分	開講年次	必・選	開講期	単位数	担当教員名
人間社会展望	パースペクティブ	1	必修	前期	2	太田 英比古

- ◇講義目的◇ <テーマ>「日本の政治や社会の変遷を実証的に考察し、将来を展望したい」
 <目標>史料講読を通じて日本史の研究方法を学び、併せて歴史学習の今日的意義を考える。
 <概要>日本の歴史の、大きな政治や社会の転換期を中心に概観したい。それは、7世紀末の律令国家(古代天皇制国家)の成立であり、12世紀末の武家政権(中世国家)成立であり、16世紀後半から17世紀初頭にかけての織豊政権・江戸幕府(近世国家)の成立であり、19世紀後半の明治維新から帝国憲法発布までの明治国家(近代天皇制国家)の成立であろう。そして、第2次世界大戦の敗戦により国民主権国家として出発し、今日に至っているのである。又、特に転換期の前提条件とその帰結を重視したい。

◇授業内容◇

第1回	日本史を学ぶ目的。史学研究法概論
第2回	農耕社会の形成 ―縄文時代から弥生時代へ(小国家の成立)―
第3回	東アジア情勢と律令国家の成立 ―古代天皇制国家の成立―
第4回	承平・天慶の乱の史的意義 ―中世的世界へ―
第5回	平安王朝と藤原摂関家
第6回	治承・寿永の騒乱と鎌倉開幕 ―中世国家の成立―
第7回	元寇と荘園経済の発展 ―鎌倉幕府の衰退―
第8回	室町幕府の権力基盤 ―応仁の乱から戦国時代へ―
第9回	織豊政権と江戸開幕 ―近世国家の成立―
第10回	幕藩体制の成立と江戸文化 ―農民の生活と関連して―
第11回	欧米列強のアジア進出と明治維新
第12回	明治国家の成立 ―大日本帝国憲法の発布と近代天皇制国家の成立―
第13回	帝国主義の時代 ―第1次・2次世界大戦と日本―
第14回	国民主権国家の成立(日本国憲法の発布)とその後の日本
第15回	講義のまとめ ―「温故知新」の今日的意義―

- ◇成績評価◇ 定期試験に出欠を加味する。

- ◇使用教材◇ 『日本史年表 第四版』(岩波書店刊のものが一般的であるが、他の出版社のものでも可)。又、講義の進行に合わせて、関係史料のプリントを配布する(『史料による日本の歩み・古代編・中世編・近世編・近代編』の該当条)。

- ◇特記事項◇ 明確な目的意識を持って授業に望むこと。

科目名	科目区分	開講年次	必・選	開講期	単位数	担当教員名
心理臨床展望	パースペクティブ	1	必修	前期	2	末松 渉

◇講義目的◇ 科学的学問としての心理学は、19世紀中ごろに始まっている。心理学にどのような領域があるのか、どのようなテーマが取り上げられているのかを概観し、日常生活に密接に関連していることへの気づきに誘う。同時に、専門的学習を深めるための基本的・基礎的知識を学ぶ。

◇授業内容◇	
第1回	オリエンテーション:心理学小史
第2回	科学的方法について:調査方法、実験的方法など。
第3回	感覚について:われわれはどのように周りの刺激を感覚として体験するか。
第4回	知覚について:さまざまな知覚の仕方について。
第5回	学習について:古典的条件付け、オペラント条件付け、認知的学習など。
第6回	記憶について:記憶と忘却、想起要因など。
第7回	動機づけについて:動機づけ理論、社会的動機づけ、情緒体験など。
第8回	パーソナリティについて:主要なパーソナリティ理論など。
第9回	パーソナリティについて:パーソナリティの見立て。
第10回	発達について:主要な発達理論など。
第11回	発達について:発達と心の健康について。
第12回	心の健康と心理的障害について。
第13回	社会心理学について:主要な社会心理学。
第14回	コミュニティ心理学について:地域社会に生かされる臨床心理学と社会心理学。
第15回	現代心理学の課題について:心理学の最近の動向を概観する。

◇成績評価◇ 試験の成績及び出席状況により評価する。

◇使用教材◇ サトウタツヤ 高砂美樹 著『流れを読む心理学史』有斐閣アルマ
講義の中でも、適宜、参考図書などを紹介する。

◇特記事項◇ 心理学学習の基礎とも言える科目である。心理学諸領域の主要な視点を紹介するので、短時間でも、各回の講義内容の復習を求める。

科目名	科目区分	開講年次	必・選	開講期	単位数	担当教員名
総合経営展望	パースペクティブ	1	必修	前期	2	宮入 小夜子

◇講義目的◇ 経営学を初めて学ぶ学生のための入門編として、経営の基礎知識を修得する。企業の動きや経営行動の基本的な問題に関して、現在の企業がおかれた状況を踏まえて理解していく。

授業内容	
第 1 回	経営学とは～学問としての対象領域
第 2 回	経営学の成立
第 3 回	組織としての企業～経営環境と企業への影響
第 4 回	企業の戦略(1)～戦略とは何か
第 5 回	企業の戦略(2)～経営戦略論
第 6 回	組織デザインと組織構造(1)～“組織は戦略に従う”
第 7 回	組織デザインと組織構造(2)～組織の分化と統合機能
第 8 回	組織デザインと組織構造(3)～組織構造の形態
第 9 回	コーポレートガバナンス(企業統治)(1)～企業経営における「正当性」の条件
第 10 回	コーポレートガバナンス(2)～コーポレートガバナンスの成立と背景
第 11 回	コーポレートガバナンス(3)～ステークホルダー(利害関係者)と企業の社会的責任
第 12 回	コーポレートガバナンス(4)～企業不祥事と内部統制
第 13 回	コーポレートガバナンス(5)～“内部告発”と通報者保護制度
第 14 回	組織の存在意義と経営理念
第 15 回	経営環境の変化と企業の経営課題

◇成績評価◇ 評価は出席と授業内に行うミニテスト、および最終レポートで総合判断する。

◇使用教材◇ 毎回プリントおよび資料を配布する。

◇特記事項◇
 ・授業内で毎回課題を行うため、出席を重視する。
 ・参考文献： 榊原清則 「経営学入門」[上] 日経文庫 853

科目名	科目区分	開講年次	必・選	開講期	単位数	担当教員名
経営情報展望	パースペクティブ	1	必修	前期	2	五藤 寿樹

- ◇講義目的◇ IT(情報技術)の普及により、経営や行政の組織経営における情報活用が飛躍的に増大しています。現代における組織経営ではIT が、きわめて重要な要素となっています。
本講では、この情報技術についての基礎的な事項(ハードウェア、ソフトウェア、ネットワーク)について学習します。

授業内容	
第 1 回	ガイダンス 本授業の概要と今後の進め方について説明する
第 2 回	入出力装置(入力装置) 入力装置にどのようなものがあるかを理解する
第 3 回	入出力装置(出力装置) 出力装置(ディスプレイ装置・プリンタ装置)にどのようなものがあるかを理解する
第 4 回	記憶装置 記憶装置(主記憶装置・補助記憶装置)には、どのようなものがあるかを理解する
第 5 回	コンピュータシステム コンピュータは、どのような装置でできており、どのように動作するかを理解する
第 6 回	コンピュータ等のカタログの読み方 パソコン等のカタログの読み方を理解する
第 7 回	ソフトウェア ソフトウェア概念について理解する
第 8 回	表計算ソフト 表計算ソフト・データベースの概念について理解する
第 9 回	データベース リレーショナルデータベースについて理解する
第 10 回	日本語情報処理 コンピュータで日本語を扱う環境について学習する
第 11 回	ネットワーク ネットワーク概念について理解する
第 12 回	インターネット(1) 電子メール、ネチケット、メーリングリスト、ウイルスについて学ぶ
第 13 回	インターネット(2) インターネットの歴史とホームページを中心とした発展を学習する
第 14 回	インターネット検索 検索エンジンを使って情報検索する方法を学習する
第 15 回	本科目のまとめ

- ◇成績評価◇ 講義授業ごとに行う小テスト(80点)と、学習態度(20点)により評価する。
- ◇使用教材◇ 授業では、アニメーションを活用した教材を利用して進める。教材としては、それをハードコピーした教材とその補足資料を中心に印刷したものを配布して学生用教材とする。
- ◇特記事項◇ 積極的な授業への取り組みを望む。
遅刻は認めない。

科目名	科目区分	開講年次	必・選	開講期	単位数	担当教員名
国際秘書展望	パースペクティブ	1	必修	前期	2	北垣 日出子

◇講義目的◇ 「秘書」という言葉を知っていても、秘書の仕事について正しく理解している人は少ない。また、秘書は女性の仕事と思われがちだが、日本には秘書として活躍している男性も多い。本講座では、秘書を、歴史、働く組織や働く形態、職務、求められる資質や能力など、さまざまな角度から眺め、秘書という仕事を一つのモデルとして組織の中で働くことの意味を考えていく。「秘書検定試験」の「資質・職務・一般知識」の領域に対応している。

授業内容◇	
第1回	『オリエンテーション』 授業の進め方、成績評価について説明した後、日系企業、外資系企業で働く秘書の仕事ぶりをビデオを見て、秘書の職務と役割を理解する。
第2回	『秘書とセクレタリー』 「秘書」と「セクレタリー」について、辞書、研究者、関係機関、行政機関などの定義を調べ、類似点と相違点をまとめ、日本の秘書の特色を探る。
第3回	『秘書の歴史—外国の秘書の歴史』 秘書はいつ頃から存在していたのだろうか？ 古代文明王国の書記の役割、中世の聖職者(クラーク)などを取り上げ、外国の秘書の歴史を学ぶ。
第4回	『秘書の歴史—日本の秘書の歴史』 日本の小国家時代から近代にいたる歴史を通して、秘書の存在とその役割を概観する。
第5回	『秘書の歴史—現代の秘書』 20世紀後半に始まった情報化時代・ナレッジソサエティと秘書について学び、秘書の歴史に見られる現象について考える。
第6回	『会社の仕組み(1)』 新会社法に基づいて、会社の種類、機関設計について基本的な知識を学ぶ。
第7回	『会社の仕組み(2)』 会社の経営組織とその形態について学んだ後、企業のURLを用いて各社の経営組織について、事例研究を行う。
第8回	『経営者の役割』 秘書が補佐する経営者は、どのような立場でどのような役割を担っているのかについて理解を深める。
第9回	『秘書による補佐形態』 秘書はどのような立場で、どのような形態で上司の補佐をしているのかについて、具体的なモデルを示しながら学ぶ。
第10回	『秘書の職務と役割』 第9回で学んだことをもとに、具体的な職務と役割について概観し、さらに医療秘書、法律秘書など専門秘書についてその職務と役割を学ぶ。
第11回	『秘書の職務内容』 情報管理、時間管理、プロトコール管理、会議・会合管理、庶務管理の視点から、秘書の職務内容を概観する。
第12回	『秘書とコミュニケーション』 秘書の人間関係について概観した後、秘書に求められるコミュニケーションについて具体的な事例を交えて学ぶ。
第13回	『秘書の資質と能力(1)』 今まで学んできた知識をベースに、職業人としての基礎力、秘書の職務遂行力、頼りになる秘書の補佐力について、具体的事例に基づき学ぶ。
第14回	『秘書の資質と能力(2)』 前週に引き続き、職業人としての基礎力、秘書の職務遂行力、頼りになる秘書の補佐力について、具体的事例に基づき学ぶ。
第15回	『秘書のキャリアデザイン』 秘書のキャリア展開について、さまざまな事例を取り上げて概観し、キャリアを高めるための資格試験についても触れていく。

◇成績評価◇ 平常点(出席、受講態度)、レポート、試験による総合評価。

◇使用教材◇ 教科書は特に指定せず、書き込み形式のレジュメを配布する。参考書は適宜紹介する。

◇特記事項◇ 特になし。

科目名	科目区分	開講年次	必・選	開講期	単位数	担当教員名
美学芸術展望	パースペクティブ	1	必修	前期	2	飯森 豊水

◇講義目的◇ 芸術を楽しむようになるための入門的な科目。西洋音楽では 17 世紀初頭に誕生した「オペラ(歌劇)」において音楽、文学、美術、演劇といった諸芸術を総合する表現が行われてきた。そこに描かれる人間像は時空を越えて、こんにちの私たちにも強くアピールする力を持っている。ここでは「女性の生き方」に焦点をあてて、共感を持って作品を鑑賞することを通して、とりわけ芸術的音楽表現に慣れることを目的とする。

授業内容◇	
第 1 回	イントロダクション:授業の意図の説明。オペラの描く人間像。オペラの誕生とバロック時代のオペラ。モンテヴェルディの《ポッペアの戴冠》について。
第 2 回	モンテヴェルディ《ポッペアの戴冠》 作品の解説と鑑賞① 第1幕
第 3 回	モンテヴェルディ《ポッペアの戴冠》 作品の解説と鑑賞② 第2幕
第 4 回	モンテヴェルディ《ポッペアの戴冠》 作品の解説と鑑賞③ 第3幕
第 5 回	古典派のオペラ。 モーツァルトの《コジ・ファン・トゥッテ(女はみんなこうしたもの)》について。
第 6 回	モーツァルト《コジ・ファン・トゥッテ》 作品の解説と鑑賞① 第1幕
第 7 回	モーツァルト《コジ・ファン・トゥッテ》 作品の解説と鑑賞② 第2幕
第 8 回	ロマン派のオペラ。ヴェルディの《ラ・トラヴィアータ(椿姫)》について。
第 9 回	ヴェルディ《ラ・トラヴィアータ》 作品の解説と鑑賞① 第1幕
第 10 回	ヴェルディ《ラ・トラヴィアータ》 作品の解説と鑑賞② 第2幕
第 11 回	ヴェルディ《ラ・トラヴィアータ》 作品の解説と鑑賞③ 第3幕
第 12 回	20 世紀のオペラ。ストラヴィンスキーの《放蕩者の遍歴(道楽者のなりゆき)》について。
第 13 回	ストラヴィンスキー《放蕩者の遍歴》 作品の解説と鑑賞① 第1幕
第 14 回	ストラヴィンスキー《放蕩者の遍歴》 作品の解説と鑑賞② 第2幕。
第 15 回	ストラヴィンスキー《放蕩者の遍歴》 作品の解説と鑑賞③。第3幕。授業のまとめ。

◇成績評価◇ 出席点、平常点、およびレポート(あるいは試験)の成績によって判断する。欠席が3回を超えると単位が取れない場合がある。

◇使用教材◇ 必要に応じて授業内で指示し、資料を配布する。

◇特記事項◇

科目名	科目区分	開講年次	必・選	開講期	単位数	担当教員名
国際文化展望	パースペクティブ	1	必修	前期	2	原田 操

◇講義目的◇ 「ヨーロッパ」について、生活・文化の観点から、個々の国の違いを超えて何がこの地域を共通に特徴づけているか考えるための基礎的知識を得ることを目標とする。

「ヨーロッパ」を語る上で欠かすことができない「欧州連合」の成立と発展は、この地域内部にある統合への傾向の一つの到達点であるように見える。だが同時に、ヨーロッパの歴史とは国境の歴史でもあり、そこには分割と多様化に向かう傾向が同時に認められもするのである。さらにヨーロッパは、絶えず流入する多様な要素を同化してきた地域でもあった。このような時には相反する傾向を持つヨーロッパを包括的に理解するために幾つかの視点を提示し、考察する。

「国際文化展望」では主にロマンス語文化圏に例をとって論を進める。

◇授業内容◇

第1回	講義の対象である「ヨーロッパ」を定義し、これから講義を進める上で必要となる基礎的事項を確認する
第2回	「ヨーロッパ」についていかなる既成のイメージが存在するか、それらが何に基づいているかを考える
第3回	現代のヨーロッパについて、世界における地理的広がり、構成員である個々の国々、言語使用の状況、住民、宗教などを概観し、共通の認識を得る
第4回	現代のヨーロッパ、「欧州連合」について学ぶ： ①「欧州連合」成立に至る経緯とその後の展開 19世紀フランスの文学者、ヴィクトル・ユゴーは「欧州合衆国」の構想を抱いたが、実際に欧州の統合が始まったのは20世紀の半ば、第2次世界大戦の廃墟のなかからであった。「欧州連合」の加入国が27ヶ国となり、半世紀以上に渉って進められてきた欧州の統合は、今ではそれ自体が欧州の歴史や人々の生活やものの考え方に多大な影響を及ぼすものとなった。だがかつては、このような考えそのものが哲学者や文学者が頭の中で描く単なる空想や夢として受け取られていた時代もあったのである
第5回	②「欧州連合」の基本原則
第6回	③「欧州連合」の機構の理解と将来的な展望
第7回	歴史的ヨーロッパを考える： ①ヨーロッパの歴史の共通地盤とはどのようなものかを探る
第8回	②多様な複数の文化が存在するヨーロッパ地域
第9回	③国家中心に読み直されるヨーロッパの歴史
第10回	④ギリシャ・ローマ、キリスト教などの伝統を共通基盤とした、各国の歴史や個別の文化について
第11回	ヨーロッパの心性にふれる： ①スイス出身でフランス語で文明批評などを著したドゥニ・ド・ルー・ジュモンは、彼自身がすぐれたヨーロッパ的存在であるとも言える(事実彼は「ヨーロッパ連邦主義」を唱えている)。ここではド・ルー・ジュモンが『愛について』などの著作で展開している論を紹介する
第12回	②ヨーロッパ人の精神の底流にある「愛」の概念について考える
第13回	日本とヨーロッパの関係について考える： ①ヨーロッパと日本との隔たりの大きさは単に地理的なものだけではないが、互いに何を教え、学びあえるか？これまでの講義内容を踏まえて、経済的な観点から語られやすいヨーロッパと日本との関係を、生活や文化の面から捉え直す。
第14回	②ヨーロッパとは将来的にいかなる交流が可能か。
第15回	まとめ、また必要な場合は補遺を行う。

◇成績評価◇ 出席状況、授業への関与度、テストの結果等を考慮して総合的に評価する。

◇使用教材◇ 必要に応じ、講義で扱う各テーマと *serpent monétaire, politique agricole commune, Traité de Lisbonne* などの概念の理解を補助する図表、資料などをプリントとして作成し配布使用する。

◇特記事項◇ 真面目な受講態度を望む。